

浦和レッズからみる Jリーグクラブの成功事例

Success case in J.League club through Urawa.Reds

1K04A197-8

兵藤 慎剛

指導教員

主査 中村好男先生

副査 石井昌幸先生

緒言

Jリーグの中で最も成功を収めているクラブの1つとして挙げられるのが浦和レッドダイヤモンズ(以下浦和レッズ)だろう。浦和レッズは開幕初年度から Jリーグに参加し、J2降格も経験したが1年でJ1に復帰後は数々のタイトルを獲得した。観客動員では熱狂的なサポーターを背景に、2006 年度は平均観客数 45,573 人を記録したのをはじめ、Jリーグ随一の観客動員を誇っている。本研究では、浦和レッズをJリーグにおける最も成功したクラブとして、日本のプロサッカークラブ発展の成功モデルとして研究する。浦和レッズの歴史、収支構造、クラブ独自の取り組みなどをまとめることによって、浦和レッズがいかに発展していったか、成功の理由を明らかにしたい。

方法

以下の項目について資料を基にまとめる。

- ① 浦和レッズのクラブ概要
- ② 浦和レッズの歴史
- ③ 浦和レッズの経営状況と観客動員
- ④ 浦和レッズのサポーター獲得のための独自の取り組み

研究の概要

Ⅲでは浦和レッズのクラブ概要と活動理念についてまとめた。浦和レッズは①「浦和レッドダイヤモンズは、社会の一員として青少年の健全な発育に寄与します。」②「浦和レッドダイヤモンズは、地域社会に健全なレクリエーションの場を提供します。」③「浦和レッドダイヤモンズは、さいたまから世界に向けて開かれた窓となります。」の3点を活動理念として掲げている。このような理念を掲げているため、クラブ概要をみても、地元企業をおおく株主に持ち、クラブエンブレム、クラブ名など随所に地域密着しようとする姿勢が見られた。

Ⅳでは、クラブの歴史についてまとめた。浦和レッズの歴史は「JSL(日本サッカーリーグ)時代」「Jリーグ創設時」「Jリーグ開幕時」「成績上昇期からJ2降格時」「J1 復帰から現在」という風に区分することができた。JSL 時代には三菱重工サッカー部として活動し、2部リーグに低迷する時代もあったが古河、日立と並

んで、丸の内御三家の一面を成し、リーグ運営の中心にあった。その後 Jリーグが創設される時には浦和と三菱自工は、堅実なチームを作っていこうという両者ビジョンの一致を軸に折り合い良く話が進み、浦和レッズ誕生へと結実した。開幕後は年間順位で 2年連続最下位となり、ガンバ大阪や名古屋グランパスとともに、「Jリーグのお荷物」と呼ばれてしまうが熱狂的なサポーターは当時から有名だった。その後、成績は向上するも、J2 に降格してしまう。しかし、1年で J1 に復帰すると、成績は伸び続け、タイトルを獲得するなどビッグクラブへと成長した。

Vでは浦和レッズの経営状況と観客動員についてまとめた。浦和レッズの収入の内訳はクラブの財政を支えているのが、スポンサー収入、入場料収入、そしてグッズ売り上げの 3 つになっていた。また、観客動員についてみると、浦和レッズは成績だけに影響されず集客できていたことがわかった。そして、スタジアムは常に高い収容率を誇っていたことも判明した。

Ⅵでは浦和レッズのサポーター獲得のための独自の取り組みとして事業運営部とレッズランドについて言及した。事業運営部では、試合運営業務、ファン作りに関する業務、チケット業務の 3 つの業務を行っていた。レッズランドでは浦和レッズがレッズランドの施設やプログラムをただ単に提供するだけではなく、会員の方々、住民の方々、地域と一緒に本格的な地域スポーツ文化を構築するために、交流やコミュニケーションを重視した運営をしようとしている

考察

浦和レッズはゲーム(試合)をコア・バリュー」とし、「地域と一体」になって作り出し結果として、浦和レッズは好循環モデルを生み出し今日のようなビッグクラブへと発展したのではないだろうか。この「浦和レッズモデル」は今後他の Jリーグクラブが発展していくにも大きなヒントになるのではないだろうか。小さな町でもその町のコア・バリューが存在しているはずである。今後そのような小さな町から Jリーグクラブが生まれることを望む。